

地域“共育”を考える ～子どもの心の豊かな育ち～（要約）

平成23年1月6日

平成22年度「地域で支える子どもの育ち」講演より



早稲田大学文学学術院 教授
増山 均

私に与えられたテーマは、「地域共育を考える」ですが、「共育」「共に育つ」、これが本日のキーワードであります。

「日本の子育て」今昔を見つめる

最初にお話ししたいのは、今年、卒業論文のテーマに、「結婚する必要がない」ということを論証するテーマを掲げた学生や、それから「なぜ子どもを産み育てなきゃいけないのか」ということを疑ってかかっている学生が現れたことです。2009年12月に内閣府が男女共同参画社会に関する世論調査の結果を発表しましたが、そこでも42%が「結婚しても必ずしも子どもを持つ必要がない」と答えています。しかも20代では6割がそう答えているという結果が出ておりました。それが日本の現状です。

そうした実態を目の前にして子どもを産み育てるということを、社会を挙げて支援していこうとしているわけですが、そのときには是非ご紹介したいのは、今から100年ちょっと前の日本の姿です。当時は子どもを産み育てることは当たり前で、誰も先ほどの学生のような問いは持たなかったと思います。では、当時の日本の子どもはどのように育っていたのか、育てられていたのかということでもあります。その手がかりの一つとしてエドワード・モースが書き残した日記をご紹介します。1877（明治10）年に書かれた文章です。当時は学校制度がしかれて5年目ですから、まだ学校はそれほど力を持っていない、子どもは学校以外の場で元気に育っていた時代だと思いますね。

「いろいろな事柄の中で外国人が異口同音に指摘することが一つある。それは、日本が子どもたちの天国（パラダイス）だということ

だ。日本の子どもたちは親切に扱われるだけでなく、他のどの国の子どもたちよりも多くの自由を持ち、それを乱用することなく、より多くのさまざまな喜ばしい体験を持っている。罰もなく、とがめもなく、しかられることもなく、がみがみ小言を言われることもない。日本の子どもが受ける寵愛と特典を考えると、確かに彼らは甘やかされてだめになってしまいそうに思えるが、とんでもない。日本の子どもほど両親を敬愛し、老人を尊敬する者は、世界中どこを探してもいない。なんじの父と母を敬え。これは日本人に深く深くしみ込んだ特性である」

今、虐待が非常に深刻ですね。子どもの安全・安心が奪われている。子育てについての様々な不安要因が広がっています。子育ての悩みやリスクを抱えないためには子どもを持たないことがいちばんよいのだというところに日本社会の若い世代が行き着いたことを考えると、モースの文章は夢のような指摘です。当時外国から来た人々が同様のことを書き残していますから、あながちモースの指摘は間違っていたとは思えません。そうすると、100年このかた、日本の子育ては進歩したのかということになるわけですね。教育制度が整い、児童福祉制度も整い、さまざまな取り組みをして、子育て支援に力を入れています。果たして日本社会は進歩したのかと。何か逆に後退しているのではないかと考えてしまいます。

共同体の解体と 「子育て支援」の必要性

さて、「共」「共に育つ」「共育」ということをキーワードにこれから考えてみたいわけですが、その共育の「共」は、共同の「共」で

あろうと思います。さらには公共の「共」、あるいは共生の「共」なのだろうと思うわけです。このいちばん最初の共同というものが先ほどのモースが見た日本の子どもたちの育ちの背景にあった。つまり人々の共同の力に支えられて子どもたちが生まれ育っていったのではないかと思うわけです。モースが見た日本の子どもたちを支えていた背景に、三つの重要な仕組みがあったと思います。

まず一つめは、「子育ての習俗」によって子どもの発達の節々が確認されていたということでもあります。つまり1歳になれば「誕生餅」を背負わせて子どもがしっかりと立って歩けるようになることをみんなで祝った。「七五三」のしきたりもただ着物を着てお参りに行くだけではなくて地域のみんなで育ちを祝い、見守っていく。13歳の思春期に入るところには「十三参り」というようなしきたりがあって子どもたちを社会に押し出していく。子どもが社会の人々と交わり社会的体験をひろげ、鍛えられて大人になることの準備をするというような仕組みがつくられていた。地域共同の力で子どもを育てていく仕組みが学校の外にあったということです。しかし今その力はほとんど失われています。

二つ目は、子どもを育てる「共同の子育ての輪」がつくられていた。生まれたときから「名づけ親」を決めたり、「拾い親」を決めるなど、何人もの親をつくったわけですね。実際に産んだ親だけでなく育ちを見守る親をいっぱいつくっておくわけですよ。子どもがつまずいたときに応援してくれる、親が困ったときに駆けつけてくれる。昔は子育てを支え合う地域の人々の共同があったということですね。

三つ目は、「子どもの集団」があったということです。きょうだい関係も多かったし、地域の中に異年齢集団、ガキ大将集団があって、それを地域の大人たちが認めていた。「子ども組」あるいは「小若連」がつくられ、そしてそれは青年組織とつながっていた。地域の行事や祭りには大人—青年—子どもというふうにそれぞれの役割があって、子どもたちも地域社会で期待され重要な役割を果たすとい

うことを通じて、順番に青年を見て育つ、大人を見て育つ、という仕組みがあったということですね。このような仕組みが日本の子どもを一人前に育てていた。つまり共同の子育て力があったから、モースの日記のように欧米人が驚くような日本の子どもの育ちの姿があったのです。こうした共同の子育て力がどんどん消えてきたのです。

さて、明治から今日までを大きくスケッチすると、「共」が失われてくる時代だったといえると思います。

かつての村共同体には、「しがらみ」のように絆あるいは血縁、地縁という縁があって人々が支え合い、縛り合っていたわけですね。それが最近完全に緩んで、縁が切れた、絆が切れた、紐帯が緩んだ状況になって「無縁社会」になってしまった。この緩みは「外部化」あるいは「個人化」というふうに社会学などではいわれているわけです。「外部化」とはということかということ、家族と地域の中にある、子どもを育てていく機能が外に出ることです。

これは子どもだけではなくて高齢者についても当てはまります。とりわけ高度成長期に労働力として村々から出てきた人たちは核家族をつくったわけですね。地域、家族から離れて村から出てきた人々が高齢化して、その高齢者たちの介護の問題をどうするかということが、今日本の巨大な課題になっているわけです。まさに「共同」が失われてくる時代を私たちは歩んできて、その一つがお年寄りの寂しい孤独死であったり、一方では子育てで不安であったり、さまざまな問題が目の前に現れてきています。そこでもう一度「共」を社会的につくり直し、新たな形でのつながり、支え合いを生み出す。今日の言葉での、ネットワークを構築していくということが新たな社会的な課題になっています。

ライフサイクルにおける「困難期の重なり」と共（社会的ネットワーク）の必要性

さて、社会化の必要が高まったにもかかわ

らずこうした社会的ネットワークが十分ではない中で、今問われているのは、ライフサイクルにおける混乱期をどのように乗り切るのかということだと思います。

まず、オギャーと生まれた子どもは、一人では生きていけませんから、絶対大人の手が必要なわけです。そのときにできる限り多くの大人の手があったほうが子育ては安心なわけですね。ですから、何人もの親を決めておくのはよい方法でした。かつては身近にお年寄りもいたのですが今、お年寄りはいない。子育てに協力してくれる親がいない中で、母子カプセル状態が出現している。いわゆる〈保育期〉、0歳から特に3歳ぐらいまでのところで母子カプセル状態になると極めて危ないと思います。子どもはうんちをしますし、おしっこを漏らすし、食べ物も散らかすし、夜泣きはするわけですから、これらの困難にすべて一人の母親が付き合っていたら誰だっておかしくなりますよ。そのとき側に誰かがいれば、手があれば、その間に母親が休めるじゃないですか。昔はそうにして子育ての困難と危機を乗り切ってきたわけですね。

ところが、今、母子カプセル状態ですから、つらい。虐待のパーセントがいちばん高いのは実母です。それは当然です。母親だけに子育ての責任が課せられているわけですから。母親が一人だけで子育てをしているというこんな大変な時代は今までの歴史の中でないわけで、子育て不安の中から児童虐待が広がる。これがリスクポイントの一つです。

それから、お年寄りの孤独死。お年寄りも一人では動けない、生きていけないその同じ状況に、私たちもなる可能性があるわけで、そのとき一体誰が支えるのか。今、日本社会は人生の最後の〈介護期〉のところでも非常に深刻な問題が噴き出しています。

三つ目は〈思春期〉です。昔も今もこれからもこの時期の子育てがいちばん難しい。子どもが性的に自立し大人の仲間入りしていく転換期です。親子が激突する。激突した親子では解決できません。間に第三者が入らなきゃ問題を解決できない。ところが近くに頼

りになる人がいるわけじゃない。支えてくれる近所のつき合いがあるわけじゃない。親子が激突した場合、いったいどうするのでしょうか。そのときに共同の子育ての輪社会的ネットワークがあれば、悩みを相談して援助をお願いすることもできるわけです。それがなければ、この思春期の子育ては難しいでしょう。

もう一つは〈思秋期〉といわれている時期です。今日本の自殺者は3万人といわれていますが、そのかなりのパーセントがこの思秋期の時期に起きている。これまでも女性は更年期に困難があるといわれてきましたが、男性にも更年期があり、心身に困難を抱える時期がある。

〈保育期〉〈思春期〉〈思秋期〉〈介護期〉、人生の中にはこの四つのリスクポイントが組み込まれているわけで、人生80年時代になってここをどう乗り切っていくのかということが非常に大きな問題になっているわけです。

「子育て支援」はちょうど最初の乳幼児期・保育期の問題と、それから思春期のポイントを見すえながら、その間の年代をどう支援していくのかということに光を当ててきた。それまでの「子育て支援」は明らかに乳幼児期対策でした。その後の少年少女期をどうするのか。思春期も含めてトータルに子ども期を考えるようになってきています。

人生80年を20年で四つに区切り、どの20年が重要かと考えれば、これは明らかです。どこも重要ですけど、誕生からの最初の20年はとりわけて重要です。この時期を失うとその後がありませんので、ほかの時期よりも最も重要なわけです。子ども期の優先性というのがあるわけです。子育て支援がなぜ重要かといえば、子どもを育てることだけじゃないんです。「子どもを育てる子ども」を育てるということと私は思っています。子どもを育てることで、将来、その子が次の世代の子どもをしっかりと育てることが求められているのだと思います。

そして、このライフサイクルにおける困難期、とりわけこの三つが重なるところがある。これがはっきり見えてきた。子どもが〈思春

期〉になると、親が〈思秋期〉になる。その親と一緒に住んでいようと住んでまいと〈介護期〉に入る可能性がある。そうすると、その間に位置する世代は、子は思春期、親は介護期、そして自分は思秋期という三重苦の中に投げ込まれます。サンドイッチジェネレーションといわれる世代が今非常に苦しんでいる。社会は経済的にも大変ですし、職場も忙しい。そういう中で思春期の子育てと親の介護で悩む。今日本人のライフサイクルは非常に大きな危機の中に投げ込まれている。共同の「共」が失われると、保育期も思春期も介護期も、そして自分たち思秋期も非常に不安定になる。それだけに新たなつながりをつくり、支え合って困難を乗り越えるための社会的ネットワークの「共」を生み出していかねばならないという課題があるのではないかと思います。

次にこの「共」ということをキーワードにメインテーマである「共育」という言葉を考えてみます。二つの側面から「共育」とは何かを問い直したいと思います。

「共育」とは何か— 三つの「育」の総合としてとらえる

第一に、「養育」「遊育」「教育」、この三つの「育」を切り離さないことが「共育」というキーワードを立てる意味だろうと思います。教育は子どもを育てることの一つであることは間違いありませんが、しかしそれが強くなり過ぎると危ないと思います。

教育基本法が2006年に改正されましたが、そのとき「家庭教育」という条文が第10条に入りました。しかし私は「家庭教育」をあまり強調するのはいかなるものかと思えてなりません。家庭教育は重要であることはもちろんですけど、それ以上に重要なことが家庭にはあるからです。

家庭で重視すべき「育」は何かといえば教育ではなくて私は「養育」であると思います。養育をまず丁寧にきちんとやらずに、教育が先走ると子育てが崩れていく可能性があると思います。もうちょっと詳しく言いますと、

この養育というものには、三つポイントがあります。

一つは今食育といわれているように食事です。外食ではなく家庭で一緒につくって楽しく食べる。孤食にならないようにする。食育は非常に重要な家庭の営みです。家庭で食べなくなる子どもが思春期に家を飛び出すわけです。家庭の食が崩れると夫婦も危うくなります。家で食べなくなったら、これは危うい。

二つ目、安心して眠るところです。家で寝なくなったら危ないわけです。子どもでも夫婦でも。安心して眠れるということは重要な点です。

そして三つ目、それは目に見えないのですが、非常に重要なものがあります。それは空気です。家庭の空気、雰囲気です。その空気が子どもにとって吸うのが嫌になる空気だったら、子どもは家を飛び出しますよね。乳幼児期は飛び出せませんが、思春期になると飛び出すわけです。空気が悪いから家に帰ってこない。それは皆さんの職場にもありますよ。上司が変わったら嫌な空気の職場になる、また逆によくなる。それは学校の教室でも同じです。先生によって空気が変わる。幸いにも学校や職場は上司や教師が変わります。ですが家庭の場合、親は変わらない。ここが非常に難しい問題だと思います。だから、家庭では教育より前に養育というものを大切にしなければいけない。

第二に、遊育というのを忘れてはならない。子どもたちは、子ども集団の中で、群れる、まねる、練り上げられて育ち合うということです。おそらくモースの時代は家庭にもきょうだいがたくさんいた。露地に出ればたくさん子どもたちがいた。その中で子どもは、子ども集団の中で社会性を磨いていったのだと思います。ですから、遊びの中で子どもが育つということは重要なことで、子どもが子どもの中で育っていくということの意味は非常に大きい。これを私は遊育というふうに名づけたわけです。

養育の場が家庭であれば、遊育の主たる場はおそらく地域でしょう。その上に学校での

教育。この三つを切り離さないこと、これが重要ですが、今これらが切り離されているわけです。どうも学校の教育だけが非常に強く意識されて、養育が見えない。そして遊び、子どもの仲間集団での遊びの世界がほとんど見えません。地域で子どもたちが群れ集って遊んでいる姿が見えない。子どもたちが群れてその中で育つという視点が失われ、学校教育中心主義にならないように養育と遊育と教育の三つを切り離さないということが「共育」ということの重要な視点なのではないかと思っております。

「共育」とは何か― 三つの「子育て機能」の総合としてとらえる

さて、子どもが人間らしく育つための基礎的な感情、すなわち自尊感情、自分が大切にされている、見守られている、愛されているという感情を子どもたちが抱けるということは非常に大切です。とりわけ幼いうちは、「おんぶにだっこに肩車」といいますか、子どもを親がたっぷり抱きしめて育てていく。それが満たされていないと、思春期になってもう一回確かめようとするわけです。親に愛されているか、認められているかを再確認しようとしてしなだれかかってくる。思春期になると大変ですよ。「おんぶにだっこに肩車」は子どもが軽いうちにやったほうがいい。重くなったら大変ですからね。だから、この自尊感情や信頼感を子どもが幼いときに丁寧に親子の中で育んでいくことが必要なのではないかと思えます。それから、自己肯定感、自信を持つ、希望を持つ、生きがいがある、あるいは自己有用感、人の役に立っている、ともに生きているということを、子どもが人間として育っていく中身として大切にすることが「子どもを育てる」ということの中心的中身だと思えます。

二つ目の側面は、先ほど遊育のところでも申し上げましたけれども、「子どもたちが育て合う」、これも子育てなのです。子育てというのは親が、あるいは大人が子どもを育てること

だというふうに限定すると狭くなる。つまり「共育」「共に育つ」というこのキーワードを立てれば、今いわれている「子育て」も実は子育ての重要な中身なのだととらえるべきだろうと思います。子どもたちが育て合う、社会性を鍛える最大の方が遊びです。遊びをとおして、特にトラブルの解決の中で身につけることは大きい。集団の中での練り上げ、活気活力の育成。この点で遊びにかなうものはありません。

それから、共同の仕事を通じて問われる「役割と責任」、これも非常に重要なキーワードだと思います。人間は役割を持ったときに、そして責任を持ったときに伸びるのです。どんな小さな責任であっても、責任を持たないと人間は成長しません。子どもが自分の仲間たちのボールを管理している、これも責任には変わりがないわけで、責任を子どもたちが持つということ、これは子どもたちを大人へと育てていくうえで非常に重要なポイントです。

そしてもう一つは「あこがれ」です。「生きた人間の教科書」を身近に持つ、近づこうとして伸びていく。子どもは「責任を足場にあこがれに手をかけて育つ」というふうに私は思っています。これらがないと子どもは育たない。そういう関係が実は異年齢の子どもの集団の中にある。子どもがばらばらになってしまうと、役割、責任、そしてあこがれというものが薄くなっていきます。私はそこに今日の子どもの育ちの弱さがあらわれているのではないかと思います。

そして、三つ目の側面は、親や「大人自身が子どもに育てられる」ということです。冒頭に今子育てが非常に大変になって、子どもを産み育てる必要がないのではないかと考える若い世代が増えてきたと申し上げました。それは子どもを持って育てていくことの意味が見えなくなってきたからだだと思います。子育ては大変です。その大変さは昔も今もこれからも絶対変わることはない。だけど、その大変さの中に子どもを持って育てることが人生をいかに豊かにするものなのかということを見出す目を、親の側が持つ以外に大変さを

克服することはできない。ここが重要なポイントだと思います。子どもを持たない人生があってもいいし、結婚しなくてもいいと思います。それぞれの人生選択ですから。だけど、子どもを持って育てていくことは大変だけれども非常に豊かな人生であるということの子育てをしている人たちが語れなければ、若い世代が子どもを産まなくなる。今それが語られていないわけです。子育てをしている人がみんな疲れて苦しんでいる。それを見たら、次の世代は子どもを産んで育てていこうというふうにはならないと思いますよね。

もちろんそれは社会が、子育てを支援する新たな社会的ネットワークをつくり得ていないということにも原因があるわけですが、では社会的ネットワークができるのを待てばいいかというと、これはなかなか直ぐには実現しませんから、親自身が子どもを育てながら「我が子中心主義」「あるいは教育中心の考え方」「大人中心の考え方」をどこかで脱却することが必要なのでしょう。そのためには子どもの輝きや尊さを発見する目を獲得することが大切だろうと思います。一人ひとりの親が子どもを育てながら、子どもの輝きや豊かさ、尊さを発見する目を獲得していくことを支援すること、これこそが「子育て支援」の重要なポイントです。

今、多くの子育て支援施策が代理支援になっている、子育ての代理になっていると私は危惧しています。親のかわりに子育てをやっている。そうではなくて親自身が子どもを育てる目を獲得し、力をつけることを支援しなきゃいけない。つまり「共育」の三つの側面、①子どもを育てるということ、②子どもたちが育て合うということ、③親自身が子どもに育てられるということ、とりわけ三つ目の親が育てられるということをきちんと支援する子育て支援にならないとまずいのではないかと考えているわけです。

そんなときに「子どもの権利」ということを学ぶと、この子どもに育てられるということがより深くつかめます。そのポイントは「子ども観」、子どもの見方・とらえ方を豊かにして

いくということだろうというふうに思います。

例えば、1989年に子どもの権利条約ができる前に約10年間国連で議論がされました。最初の問題提起はポーランドからなされました。ポーランドはナチスドイツによる大きな被害を受けた国ですけれども、その中で敢然として立ち向かったヤヌシュ・コルチャック（医師・作家）はこう書いています。「子どもと大人の違いは何か」。違いはないというわけですよ。違うのは年齢だけだと。生まれてから死ぬまで何歳であるかということしかなんにも変わりはない。子どもも大人も三つのことを手がかりにして生きている。一つは経験を積む。二つ目は知性を働かせる。三つ目は感性でいろんなことをとらえる。経験と知性と感性、この三つは大人も子どもも共通だと。大人と子どもの違いを述べるとすれば、経験は大人のほうが多い、これは当然です。多く生きているわけですから。ところが、知性はどうか。これは変わりが無いというわけですよ。

そして、特に感性の面を考えると、実は子どものほうが大人よりも感性が豊かなのだとコルチャックは言っているわけです。「大人は子どもとつき合うと疲れるというが、それは、あなたの感性が鈍くなって、子どもの高い感性のレベルに自分が届かなくなった疲れなのです」と、こういう言い方をしているのですね。そう思ってみると、実に子どもたちは感性豊かに生きています。私たち大人は、常識という名の経験に縛られて、どうも感性が鈍くなっているのではないかということ胸に手を当てて反省してみると、子どもの輝き、尊さが次々に見えてくるのではないのでしょうか。見えてくると子育ては楽しい。色々な発見がある。

物理的には子育ては昔も今もこれからも絶対楽にはならないと思います。ならないけれど、その中で子どもが育つ豊かさをつかめるかどうかなんです。これのみが子育ての持つ豊かさを実感し、自分自身が子どもを育てながら豊かになっていく、人間として豊かになっていく筋道です。結婚をしない人生もいいし、子どもを産まない人生もいいと思いま

す。それもありうる。だけど、子どもを持って苦勞しながら育てていくことの人生の豊かさや味わい、これを私たちがどれだけ語れるか、そこに子育て支援のカギがあると思います。

「共育」を生み出す活動から学ぶ

今、日本社会はどうしているのかというと、明らかに社会全体がその重要性にはっきりと気づいて、「子育て支援」を社会的に進めていくという時代に入ったと思います。とりわけ「地域をベースにした子育て支援を」という時代に入ったことに、私は隔世の感がいたします。地域の子育て力を豊かにする取り組みはどういうものかということを考えるうえで、次の二つのことに注目したいと思います。一つは「若者の力に注目する」ということ、それから「高齢者の力に注目する」ということです。

その一つ、若者の力とかかわって埼玉県に少年少女センターという民間団体の取り組みがあります。この取り組みを見ていますと、特に高校生や大学生の若者が小学生、中学生と一緒に地域活動をしている。年上のお兄さん、お姉さん世代が子どもたちの「あこがれ」の対象になる、そういう役割を果たしている。

例えばドッジボール大会をするにも子どもたちが50人ぐらい集まってくる。子どもたちの目の前で指導員の高校生同士がドッジボールを全力でやる。迫力あるその姿は、子どもたちにとってはあこがれです。

そんな若者たちの姿を見て、母親がこんなことを書いています。「子どもたちにとって友達とは違う、家族や先生ともまた違う不思議な存在だ。一緒に真剣に遊んでくれて、一緒に真剣に考えてくれる人、子どもと青年たちの間には違う時間が流れているのではないかと感じてしまうほど根気強く子どもたちに寄り添ってくれます。子どものわがままにつき合ってくれる。青年にはそういう力がある、そういう特徴がある。大人だったら、すぐ却下してしまいそうな意見、例えば5月にもちつきをするなど、青年はおもしろがったりして決して否定しない。結果的に実現しなかつ

たとしても、いったん受け入れてもらえたことで子どもたちは満足する。でも、その感性和寛容さは残念ながらほとんど大人はなくしてしまったものかもしれません。青年の皆さんに学びたいところです」。

母親の文章に出てくる若者の「感性」、それは先ほどコルチャックが言った感性です。もう一つ、このお母さんは「寛容」という言葉を使っています。今子どもとかかわる中で重要なのは「寛容の精神」なんじゃないでしょうか。粘り強く声を聞いてやってつき合ってやるということは、なかなか親じゃできない。それが若者にはできるんですよ。そこに私は若者を「子育て支援」のメンバーとして位置づける意味があると思うのです。もっと子どもたちと若者たちがかわることによって「生きた人間の教科書」「あこがれ」というものを身近に近づけることが「子育て支援」にとって必要なことなのではないかと思っています。

さて、もう一つご紹介したいのは、東京中野区の「なかの生涯学習大学」での高齢者の子育て支援参加です。定年退職後のお年寄り、そういう方々が、仲間をつくりながら地域で役割を果たしたいということで、1学年100人以上の方々で3年間学ばわけです。さまざまなテーマを学ばわけですけれども、その一つに教育支援ゼミナールというのがあって、私が、チューターとして入っております。

この生涯学習大学と早稲田大学の私のゼミは合同でいろいろなことをやっていますが、その一つに学校支援、地域支援というテーマを立てて、まさに地域支援ネットワークづくりの取り組みに注目しています。今年は小学校に高齢者の方、それから学生も何人か行って授業の中でどういう支援ができるのかということを実際に経験しました。その後、継続的にボランティアで学校支援に入っている方もいます。それから、見守りですね。地域で声かけの取り組みをしている人もいますし、それから草花を植えたり、その管理、水やり、そういう取り組みをしたり、あるいは学校支援だけではなく地域の児童館や子育てサークルにも高齢者がかかわっています。いろいろ

な取り組みを一緒に見にいって、何がやれるだろうか、さまざまな形で高齢者の方々の役割を発見して実際に地域活動に取り組む。中野区ではこうした高齢者の方々が生涯学習大学を通じて学校保育や地域の児童館や学童や子育てサークルなどとかかわりを持ちながら、まさに「共に育つ」ということの一部分を担っている。私は共育ちの中に「高齢者の力を位置づけていく」ということも重要なことなのではないかと思います。

最後にまとめる形でつけ加えてお話ししておきたいと思います。

「子どもを育て『地域の子育て力』とは何か」ということを考えてみますと、七つ重要なポイントがあるのではないかと思います。

まず、その第一は子どもの異年齢の育ち合いをどうつくっていくか。この異年齢は乳幼児から始まって少年少女期、思春期、若者、青年につながっていく異年齢の集団ですね。

二つ目は、子どもにとって高校生、大学生というのは、本当に大きな力です。なにしろ彼らはエネルギーがあります。若者は元気で、元気に駆け回ってだけで子どもたちはついていきます。そういう教科書としての若者の力を地域の子育て力の中に位置づけたい。

そして三つ目は、親たちのつながり、集まり、あるいは祖父母世代とのつながりの輪を地域の子育ての中で位置づけたいと思います。先ほどの三つの機能の中の親自身が子育てを学び合うということは外せないので、多世代のつながりを子育て力の一つに位置づけたい。

四つ目には、地域の多様な人材の活用ということですね、地域にはいろんなキャリアを経た方が多いですから、そういう財産が地域には多様な人材としてある。

そして五つ目には、地域の文化や芸能です。そういう地域の伝統の担い手が少なくなって大変です。大変ですが、そうしたものを大切にしていくことが子育て力として重要なポイントだろうと思います。

それは六番目の地域の歴史、伝統とも重なります。地域にはさまざまな形で歴史的な財産がある。それを子育て力として生かしてい

きたい。

そして七つ目には、地域の自然や風土というものです。これはかけがえない財産だろうと思います。地域には家庭、学校とは違って独自の力が眠っている。これを掘り起こしてコーディネートしていくことが重要な視点だろうと思います。今、共育の「共」が失われていく時代、新たにこの「共」をつくり出し、共同をどうつくるのか、その中から新たな公共というものをどう育てていくのか、そのコーディネートの役割が行政あるいは施設、NPO、NGO等々に問われているのではないかと思います。

おわりに

さて、最後になりますけれども、先ほどもちょっと触れましたように子育ての仕事は人生の中で最初の重要な20年を外すと、もうその後の人生が豊かにならない。そして、同時にその子どもの人生を豊かにするというにとどまらず、その子が次の世代を産み育てていくということが重要であると思います。子育ての困難の中で、子どもを産み育てることの価値をつかんで、仲間と手を結びながら子育てをしていく、「子どもを育てる子ども」を育てて、そして親から子へ、子から孫へというふうに世代継承していくという課題が私たちの前に鋭く提起されている、そういう課題に今真正面から向かっていこうという社会の動きの一つが地域「共育」を考えるということなのではないかと思います。

長時間ご清聴ありがとうございました。

（文責 全国市町村国際文化研修所）

講師紹介：

増山 均（ましやま・ひとし）

1972年東京教育大学文学部哲学科卒業、1978年東京都立大学人文科学研究科博士課程満期退学。1982年より日本福祉大学で勤務後、2001年より早稲田大学文学部で教鞭をとり、現在は、早稲田大学文学学術院教授。著書に、『子どもの文化権と文化的参加』（第一書林）、『教育と福祉のための子ども観』（ミネルヴァ書房）、『アニメーションが子どもを育てる』（旬報社）、『子育て支援のフィロソフィア』（自治体研究社）等多数。